

播磨の古代寺院と造寺・知識集団 10

託賀(多可)郡の古代寺院
—加古川上流域の古代寺院を歩く—

吉岡 洋

はじめに 託賀郡4里・古代寺院跡4ヶ所

加古川流域の古代寺院を中流域(賀毛郡)、下流域(賀古郡・印南郡)と紹介したので、残る上流域の託賀(多可)郡に移ります。

託賀郡に残る古代寺院跡は、多哥寺(たかでら)廃寺、八坂廃寺、野村廃寺(上ノ段遺跡)、明楽寺廃寺(仮称)の4ヶ所。『播磨国風土記』の里数は、賀眉(かみ)、黒田、都麻(つま)、法太(はふた)里の4ヶ所。『和名類聚抄』では、荒田、賀美(かみ)、那珂(なか)、資母(しも)、黒田、這田(はふた)郷の6郷になっており、大幅な人口増が注目される。

風土記に登場する人物と神を一覧する。

託賀郡の文歌に大人(おおひと)・巨人伝説

賀眉里 明石郡大海里(おうみのみさと)の人が居住

〃 荒田村に女神・道主日女命と鍛冶の神・天目一命(あめのまひとつのみこと)

黒田里 袞布(おふ)山に宗形(むなかたの)神の奥津嶋社壳(おきつしまひめ)と伊和(いわ)大神

〃 支門(さへ)丘に宗形大神

都麻里 婦麿刀壳(とめ)が丹波刀壳と土地争い

〃 都太岐(つたき) 読伎日子(よぬきひこ)の神と水上刀壳がこの地で争う

〃 比良山・錦糸山・他 すべて品太天皇

法太里 読伎日子の神と肆石命が争う

〃 花波山 近江の花波(はなみ)の神

*賀毛郡川合里にも登場する

殆ど神まで寺院の「知識」とは縁遠い。ただ、鍛冶の神である天目一神が祀られていることから、製鉄に関連する渡来系集団の居住が推測される。

また、明石、宗形(宗像)、丹波、水上、読伎、近江など他地域と、加古川上流域との交流が盛んであったことが窺える。

託賀郡住所録(「知識・慶越」リスト)



正倉院文書 奈良時代中期まで下るが、天平十七年(745)と推測される「知識媛妻寧貢進文(らしきうばそくこうしんぶん)」に2家族・4人が登場する。

宗我部小敷・宗我部老人 播磨國多可郡奈何郷
山直・山直枝 播磨國多可郡賀美郷

媛妻寧は正式な僧になる前の在俗の信者。経典を読み、暗記もしなくてはならないので、有力者の子弟であろう。東入寺法華堂の刻印瓦に「宗我部」があるが、關係不明。宗我部(そがべ)の居住は蘇我氏の託賀郡への進出を裏付ける資料。山直(やまとあたらしい)は加古川流域一带に登場する有力豪族。

木簡人名(奈良文化財研究所データベース)

日下部漢山 播磨國多可郡中郷三宅里

日下部又・日下部口・日下部 播磨國島郡口

宅部口 播磨國多可郡 *口は不明

山直小弓 多可郡那珂郷 天平九年(737)

針筒直口 同上

倭文連高山 同上

高屋諸人 播磨國多可郡豊田郷川辺里

高岡口千足 播磨國多可郡豊田郷 封戸白米

三宅里・宅部(もりべ)は、ミヤケ(三宅・屯舎)と関連する地名と氏名(うじな)。ミヤケの設定には蘇我氏と渡来系氏族が関与したと考えられ、託賀郡の日下部(くさかべ)氏は、渡来系の日下部(草香部・草壁)吉士(きし)の同族であろうか。

高岡口千足は後醍醐天皇の封戸(ふこ)なので、豊田郷(法太里)は王家所有の私有財産(ミヤケ)であつた可能性があり、託賀郡にはミヤケが集中する。

以上から託賀郡の「知識」候補としては、製鉄集団、宗我部、山直、口下部、宅部、針筒直、倭文(いどり)連、高屋、高岡口などが挙げられる。

墨書き土器 曽我井(そかい)・沢田遺跡

曾我井・沢田遺跡（多可町中区曾我井）では、平安時代前半の水器から墨書き器「宗我西（そがにい）」「宗我口」1西戸」「中家」等と共に、祭祀用木製品である人形（ひとがた）、斎率（いくし）、呪符、転用硯、製塙土器などが出土した（ひょうごの遺跡」68号 兵庫県立考古博物館 2008年）。地名の曾我井は宗我部の遺称と考えられている。

那珂ふれあい館・東山古墳群（史跡公園）

多可郡中町（なかちょう）の渕跡を見る前には「那珂ふれあい館」に寄りたい。中国自動車道・荒野社ICから175号線を北上し、427号線で中町へ。おおよそ15km。駐車場あり。多可高校・東山古墳群・那珂ふれあい館と川裾に東西に並ぶ。

北は妙見山（693m）、麓には200基を超す群集墳が確認され、東山古墳群は史跡公園（遺丘を復元）になっており開口した巨石墳が並ぶ（鍵が掛る）。

多哥寺（たかでら）焼寺

多哥寺焼寺跡は、那珂ふれあい館から南へ1km弱。杉原川東岸で、平野の真只中。現在の華興寺とその北・加都良神社の境内になる。華興寺の東は小公園で駐車もできる。公園の垣根に礎石風の石が並ぶのが気になった。東には鐵治屋線（鹿線）。

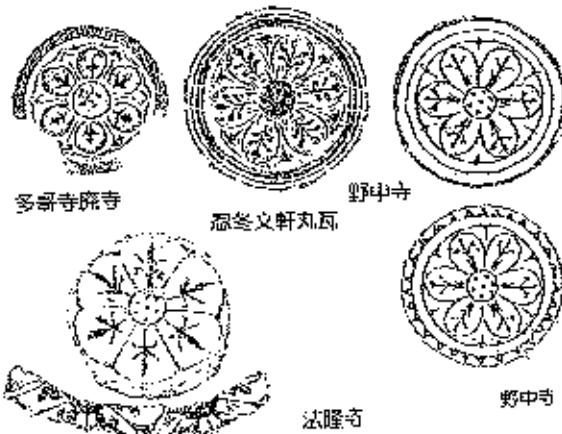
華興寺は平安時代から続く古刹で、建立以前には「多哥寺」と呼ばれる寺院が存在したことが古文書に残る。薬師堂と庫裏の間に巨大な塔心礎が置かれているが、本来の位置ではない。発掘調査が継続して行われ、報告書が刊行されている。

『多哥寺遺跡』中町教育委員会 1995年

『多哥寺遺跡Ⅱ—1980~1982年度発掘調査報告書…』中町教育委員会 1997年

伽藍配置は南北に塔・金堂・講堂が一直線に並ぶ四天王寺式かと推定されている。回廊内区の規模は、南北60m、東西52mと推定。南門と推定される「コ」の字形に巡る浅い溝状遺構（東西12m×南北7.7m）と回廊の一部以外の金堂、講堂、その他の堂塔の遺構は明らかでない。平安時代の梵鐘鋳造のための溶鉄炉遺構がある。

遺物には、創建時の軒丸瓦が6型式（A~F）。創建時には文様をもつ軒平瓦は使われてなく、平瓦の凸面に朱線（赤色顔料）が付着したものがある。



瓦以外では、鳳舞、青銅製の相輪の破片、稜塊、凹面硯、製塙土器、墨書き器「寺」、瓦塔など。

創建年代については7世紀中葉～後半と確定しないが、播磨では実態の分かれる最古の寺院である。

多哥寺創建瓦の特徴

報告書と龟田修一氏の論文により、特徴を挙げる（『播磨東北部の渡来人—多可郡を中心とした河瀬正利退官記念書古論集』2004年）。

- i) 単弁蓮華文軒丸瓦（A~D）は、比較的整った文様であるが、その系譜は明確でない。
- ii) 単弁六葉忍冬（バルメット）華文（E型式）という播磨では唯一の特異な文様の軒丸瓦が存在。
- iii) この単弁蓮華文・忍冬文軒丸瓦には枠板連結模骨（もじつ）成形（丸瓦を作る際、内型に板枠を使う方法）の丸瓦（行基式・無段式）がセットになっており、密接な技術的関連がうかがえる。
- iv) 模骨は幅広の枠板で構成され、類例は法隆寺や飛鳥・坂田寺に若干あるのみで、傍流の技術になる。「畿内非主流派朝鮮系瓦」（龟田）とも。
- v) 複弁蓮華文（F型式）は、野口麻寺（賀茂郡）、辻井焼寺（飾磨郡）に類例がみられ、慶州には類似する蓮華文を見ることができる。
- vi) 軒先に軒平瓦を使わず平瓦を使用する。
- vii) 平瓦では格子卯き目のものが主体で、縦目卯きのものが存在しない。大型で厚手。

結論として、多哥寺の瓦は畿内では傍流・非主流派朝鮮系であることが最も特徴的となる。

この瓦にみられる特徴は、多哥寺建立の造寺・知識集団が、法隆寺・坂田寺における傍流の技術や、特異な忍冬文を採用した寺院の造寺集団と関係をもっていたことを推測させるもので、いずれも渡来系氏族が関わる要素と考えられる。

忍冬(バルメット) 蓮華文の系譜

多哥寺の忍冬文軒丸瓦は、八葉の蓮弁にそれぞれ三葉の忍冬文を、中房（ちゅうぼう）には十字文を飾るなど独自のもので、まったく同じ文様は見られない。しかしここで「忍冬文」という特異なモチーフ（文様）に注目すれば、渡来系氏族が主導あるいは関わった寺院に見られる文様といえる。

忍冬文で装飾する軒瓦の出現は、倭漢（やまととのあや）氏の支族である鞍作村主（くらっくりゆすぐり）氏が主導した飛鳥坂田寺の手彫り忍冬文軒平瓦のようである。文様を飾る軒平瓦は古時期の中国・朝鮮にも見られず、鞍作村主一族による創案らしい。また、法隆寺若草伽藍での手彫り忍冬文軒平瓦の導入は鞍作村主氏が関係すると考えられている（山崎信二「後期古墳と飛鳥白鳳寺院」『文化財論叢』奈良樹立文化財研究所 1983年）。ちなみに、坂田寺では墨書き器「知識」が出土している。

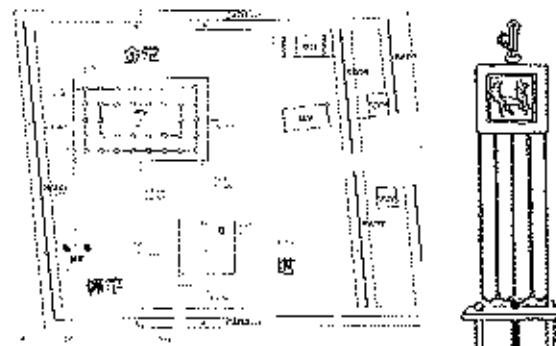
忍冬軒丸西は大別して二つの系列がみられる。上宮王家（聖徳太子）系列とでもいうか、法隆寺東院下階・中宮寺・法隆寺若草伽藍（斑鳩寺）、それに横兒庵寺（安芸）、入殷若寺（近江栗太郡）などで、いずれも倭連氏が開創すると指摘される。

もう一つは後出する河内・野中寺(やちゅうじ)の系列。野中寺では3種の忍冬文軒丸瓦がみられる。所蔵する弥勒菩薩半跏坐像には、「丙寅年……記、悟寺智識之奉、……反等人数一百十八……」との銘文がよく知られる(丙寅年は天智五年(666))。この銘文のように多数の反等が知識集團として形成され、寺の造立・運営にあたったのであろう。

野中寺創建を主導したのは西済系の船氏の他、いくつかの源来系氏族の名が挙がるが、いずれにせよ源来系氏族の知識寺院・智誠寺である。

飛鳥の諸寺院や野中寺と多哥寺の造寺知識集団の関係はどうであったかについては推測するしかないが、大略、以下のように考える。

多可郡に居住した宗我部・宍部・日下部氏等は、蘇我氏が主導したミヤケの設立・運営に觸わった渡来系氏族であろう。ミヤケの管掌者になった渡来系と在地氏族が東山古墳群を形成し、評・郡では郡領層を構成する。多哥守造立に際しては、蘇我氏・倭連氏・鞍作村主氏などから寺院造営の様々な援助・ノウハウを受けることができ、その一環として忍冬文も導入された可能性が考えられる。播磨で最も早い時期の寺院設立はミヤケが基盤であった。



野村麻寺脚鍵配器

幹事会報告と実績

野村樂寺（上ノ段（うえのだん）遺跡）

野村廃寺跡は、多哥寺廃寺から国道427号線・県道346号線を南下し、西脇高校の南、茜が丘住宅内の茜が丘集会所の東側、広場になっている一帯。現地に遺跡の表示はない。約12km。途中、宝子山公園には西脇市郷土資料館（図書館の2F）があり、野村廃寺の西400mには平安時代末の古窯跡をドームで保存展示する西脇市立緑風台古窯跡館がある。どちらもぜひ寄りたい。

廃寺跡は宅地に開発される前はぶどう園で、標高83~85.7mに立地し東の展望がよい。加古川本流と杉原川が合流する野村平野を望める。ここから約2.5km上流では、日本列島で一番低い分水嶺(90m)を跨り日本海へ流れ込む由良川と接する。

里の比定は難しいが、法太里と都麻里が候補で、法太里の可能性が高いとされる。

全面的な発掘調査が行われた(Ⅰ上ノ段遺跡(野村彦寺)、西脇市教育委員会、2002年)。

野村庸春の遺稿

南北約6.5m、東西約6.8mの築地に囲まれた部分と、築地内画の東方の井戸、瓦窯跡など。

伽藍配置は図のように変則というか独特。基壇化粧のない金堂（東西約2.3m×南北1.3.5m）は西に偏し、金堂の東南に塔（基壇一辺約1.2m）、塔と対称位置には時期の異なる幢竿（どうかん）支柱が3対立てられていた。推定講堂は金堂の東にあるが、規模が小さい。講堂の北には推定僧坊がある。

南面築地は開口しておらず、中門の構造は確認されなかった。東面は築地が二重になっており、1947年の米軍航空写真では築地中央部分が途切れていることなどから、東門があったと推定されている。

る。平地とは比高差がある。二重の築地の間には脇建物が存在し、東面内側の築地は当初木構とされる。

遺物 金箔押しの拂仏(せんぶつ)、相輪片、転用鏡、棟楓、井戸跡から巻書土器「寺」「岡」「井津」「舟之大介」「家」など。須恵器は8世紀前半のもので、他の時代のものは殆ど含まれない。

年代 8世紀前半に建立が開始され、9世紀前半ごろに廃寺になったと推定されている。

瓦とその系譜 軒丸瓦は全面調査にもかかわらず破片も出土しなかったが、素文串弁七葉軒丸瓦が一点採集されており、近隣の八坂廃寺と同範(どうはん)とされる。意匠的に関連がありそうなものとして、飛鳥坂田寺系統とされる美作五反廃寺と広渡廃寺(小野市)が挙げられている。

軒平瓦も八坂廃寺で同範もしくは同文のものが採集されており、八坂廃寺とは密接な関係がある。

丸瓦では、多賀寺廃寺でみられた無段式(行基式)丸瓦の内型に枠板連結模骨を使用したもの、有段式(玉縁)丸瓦にスダレ状内型を使用したものがあり、いずれもその技術的系譜が注目されている。

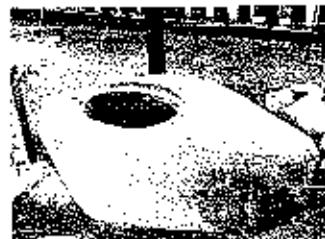
八坂廃寺(西脇市八坂町)

野村廃寺から西脇工業高校の脇を南へ下り、県道34号線を西へ、みぎわ橋まで。橋を渡ったすぐ右手(西)の病院・老人ホームが建つ一帯が八坂廃寺跡。2km弱。野間川右岸(南岸)の段丘上。

廃寺跡は現在、瓦の細片も含め痕跡を残さないが過去に瓦が収集され、米軍の航空写真に土塁跡が残る。岸本一郎(西脇市郷土資料館)氏の報文により紹介します。(「八坂廃寺を復元する」『西脇市郷土資料館紀要 嶺子山』14号 2007年)。

八坂廃寺は周囲を土塁で囲まれ、規模は南北約76m、北辺の東西約9.8m・南辺の東西約11.7mの台形状に復元されている。この土塁内の東南隅に推定金堂基壇(東西約2.6m×南北約1.0m)と礎石が存在した。他の基壇は無かったようである。土塁が築地壇の崩れたものとすれば、境内が少々さびしい。遺物は、軒丸瓦3種(複弁系2、単弁系1)、軒平瓦2種、鴨尾片がある。

創建年代は八坂廃寺が野村廃寺に先行するがほぼ重なるとされ、同時期に近隣に寺院が2ヶ所存在したことになる。移建の可能性も想定されている。しかしながら、この山腹の地に古代寺院が?



塔心礎(手水鉢)



八角形石燈籠等部



八葉の素弁蓮華文

明楽寺廃寺 塔心礎・八角形石燈籠

野間川に沿って県道34号を西へ4km強。西脇市明楽寺(みょうらくじ)集落の六所神社境内に塔礎石、隣の薬師堂脇に石燈籠と宝鏡印塔が安置されている。境内には素晴らしい藤の古木が残る。詳細な報文があり、引用します(藤原良夫他「播磨明楽寺の塔心礎と八角形石燈籠」『歴史考古学』第51号歴史考古学研究会 2002年)。

塔心礎 安山岩自然石。長径19.6cm、短径13.5cm、地上高7.5cmとかなり大きい。六所神社の手水鉢として使われており、外輪割込み部を梢円形に穿って水溜にする。それ以外は改変の跡は見られない。割込み部から排水(通気)溝が作られる。

心礎の出土地については残念ながら不明。地名にもなっている明楽寺については、創建・寺跡も不詳。瓦の出土も知られないが、伝承で残る。大門・寺田の字名もあり、寺院があつた可能性はある。

心礎の年代は、故藤澤一夫氏が実見され、白鳳時代のものである、とおっしゃられたそうだ。

八角形石燈籠 石燈籠の笠部と基底部が残り、共に稜線に八葉の素弁蓮華文が浮き彫り状に刻出している。この文様は現存する最古の遺品として知られる大和当麻寺の重文・石燈籠(金堂前にある)の中台文様に酷似する。石材は地元で産出する流紋岩質凝灰岩。ちなみに、基底に使っている石は組合せ式家形石棺の底石である。

石燈籠の年代は様式から心礎と同時期とみられている。仮称明楽寺廃寺の堂塔前に祀られていた可能性が高い貴重な遺品である。

きつね塚古墳(明楽寺1号墳) 集落の南。郵便局の脇の農道を南へ、右手(西)に小祠が祀られている。最新の組合せ式家形石棺を内蔵する。